

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 「小鳥愛好家の楽しみ」への新しい視点

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2001-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/804">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/804</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「小鳥愛好家の楽しみ」への新しい視点

大 竹 尚 之

リコーダーに携わる者にとって、楽器名の由来となった RECORDER（鳥のように歌う）という動詞にまつわる曲の世界は故郷とも呼べるものだろう。18世紀初頭にロンドンで出版された The Bird Fancier's Delight 邦題「小鳥愛好家の楽しみ」（以下「楽しみ」と略記）はリコーダー、フラジョレットを吹いて鳥に鳴き方を教えるための特異な曲集である。対象となっている小鳥は外来種も含めて11種あり、種類によって歌わせる曲数は違うが、現代譜には43曲が収録されている。曲数はウソのため11曲、カナリア9曲、ムネアカヒワ6曲と数が多い。調性的にはハ長調19曲、ヘ長調9曲、ニ短調7曲、ハ短調5曲で、40曲を占めている。音域的にも8度、9度、10度のものが39曲でここに顕著な特徴を見せている。

動物たちの言葉を理解したソロモン王伝説や、シェイクスピアが戯曲中に数多く登場させた話すことのできる鳥たち、更にロフティング著「ドリトル先生物語」など動物と人間のつながりを書いた話は数多い。物まねは声だけで無く、他の個体の美しい鳴き声だったりもする。「おしゃべりをさせるには」鳥が集中できるように、静かな場所で教えようということなど、現代の教本が伝えることは昔からの伝統なのだ（註1）。日本に於いて鳴禽類の飼育書は微細に亘り精緻を極めている。特にウグイスを筆頭に、吉野駒、伊勢頬白、出雲ノジコなど名産の小鳥たちは高額で売買され、その鳴かせ方、教育法、捕獲、育雛など伝統的に良く研究されている（註2）。

小論は1717年に出版された上記の曲集の音楽的な背景、更に小鳥たちの生態学的な側面を探るものである。

この曲集の表紙、前書き、出典及びその邦訳については以下の図、註に記した。[表紙及び前書き（図1, p75）、出典（註3A）、タイトル訳（註3B）、前書き訳（註3C）]

参照した原典は、大英博物館（K4, a1）、南葵音楽文庫（N5/3）、個人蔵（東京、I博士）であるが、現代譜は Schott 10422（全音楽譜出版 Schott 版の著作権取得による翻訳出版もある）を参考にした。この曲集には曲名はいっさい書かれていない、ふさわしい鳥の名前だけ。

「楽しみ」に含まれる曲目一覧 (表1)

No Schott版現代譜の番号  
 time time signature拍子  
 key 調性, 短調は現代譜以外当時の習慣に従って, フラットが1つ少ない表示  
 total length 全小節数  
 unit メロディーの単位, //は繰り返し記号または複小節線  
 Lst lowest 最低音  
 Hst highest 最高音  
 Total range 音域

(註4)

Name of bird	no	time	key	total length	unit	Lst	Hst	total range
Bullfinch	1	C	F	16	8//8	a'	c'''	10
	2	3/2	F	8	4//4	c''	d'''	9
	3	C//2	F	16	8//8	c''	d'''	9
	4	6/8	d	12	4//4/4	c sharp''	e flat'''	10
	5	3/4	d	12	6/6	c sharp''	d'''	9
	6	3/2	C	8	4//4	b'	e flat'''	11
	7	6/8	C	16	4/4//4/4	c''	e'''	10
	8	C	c	12	4//8	e flat''	e flat'''	8
	9	C//♯	c	6	3//3	c''	e flat'''	10
	10	no	c	16	4/4//4/4	c''	e flat'''	10
	11	3/2//♯	C	16	4/4//4/4	c''	e flat'''	10
Canary Bird	1	3/4	F	16	8//8	b flat'	d'''	10
	2	3/4	F	12	4/4/4	a'	d'''	10
	3	3/4	F	16	4/4//4/4	c''	c'''	8
	4	C	d	8	4/4	d''	e flat'''	9
	5	C//♯	d	12	4//4/4	d''	d'''	8
	6	C//♯	C	8	4/4	c''	e'''	10
	7	3/4	C	16	4/4//4/4	d''	d'''	8
	8	6/4//3/2	c	8	4/4	b'	e flat'''	11
	9	C	c	16	4/4//4/4	c''	e flat'''	10
Linnet	1	C//♯	C	16	4/4//4/4	c''	e'''	10
	2	3/4	C	16	4/4//4/4	g'	d'''	12
	3	3/4	C	18	4/4//4/6	c''	d'''	9
	4	C//♯	C	10	4//6	c''	d'''	9
	5	9/8	C	8	4//4	c''	d'''	9
	6	C	G	16	4/4//4/4	g'	c'''	11
Wood lark	1	C	C	8	4//4	c''	c'''	8
	2	6/8	d	10	4/6	c''	d'''	9
	3	3/4	C	16	4/4/4/4	b'	e'''	11
	4	C	C	16	4/4//4/4	b'	e'''	11
Sky lark	1	3/4	C	20	6/6//4/4	c''	c'''	8
	2	3/4	C	30	8/4//8/10	a'	c'''	8
	3	3/4	F	18	4/3//4/4/3	c''	d'''	9
Starling	1	C//2	G	16	4/4//4/4	d''	e'''	9
	2	3/4	d	24	4/4//4/4/4/4	a'	c'''	10
	3	C	F	16	4/4//4/4	a'	e flat'''	12
Parrot	1	6/4	C	16	4/4//4/4	c''	c'''	8
	2	3/8	C	32	4/4/4/4//4/4/4/4/4/4	g'	g'''	12
Nightingale	1	2/4	C	24	4/4//16	b'	c'''	9
	2	6/4	g	14	4/4//6	d''	d'''	8
Sparrow	1	6/8	F	10	4//6	e''	d'''	7
East India Nightingale	1	3/4	C	16	4/4//4/4	c''	e'''	10
Trosill (Throstle)	1	C	d	12	6//6	d''	b flat''	6

王政復古(1668)、名誉革命(1688/89)を経て、1714年ハノーファからジョージ1世を迎えた3年後、この「楽しみ」は出版された。それは丁度リコーダーが広く市民層に受け入れられた時期に当る。多くの教則本と曲集が出版され、リコーダー(Flute, Common Flute)が愛好された(註5)。又市民が演奏を楽しむ社交場としてYork Buildings, the Vendu, Drury Lane, Dorset Garden Theatreなど公開の劇場が活動を頻繁にし、リコーダーが広く使用されたのである(註6)。

中でも、ヘンリー・パーセルの作品群におけるリコーダー使用やロンドンで上演されたヘンデル作曲の“リナルド”に始まる、1711年以降のオペラ群はイギリスにおけるリコーダー受容を確立したと言えるだろう(註7)。更に、それらのアリア群はアムステルダムのRoger, ロンドンのWalsh等によって広く出版された。音楽的な市民権をこの17世紀末、18世紀初頭に確立したフラジョレット、リコーダーであるが、「楽しみ」に取り上げられた43曲中その出典をたどることのできる曲は限られている(註8)。明確に分かるのはヘンデルの“リナルド”Rinaldo III/ixのMarch(ウソ1)(譜例1)やジョン・ゲイ(John Gay 1685-1732)の“乞食オペラ”The Beggar's Operaの中で、「キジバトは悲しみをこめて歌う」The Turtle thus with plaintive crying(ヒバリ1)(譜例2)、「私は大洋に投げだされた小舟のように」I'm like a skiff(オウム1)のアリアである(譜例3)。

さて、この曲集はFancyer(fancier)の楽しみdelightのために書かれている(註9)。18世紀ロンドンの市民生活を伝える本にはきわものも含めて、このような喜びに浸る人々の姿が多数掲載され、またワーズワース、キーツなどイギリスロマン派の詩に鳥や自然を見い出さずに読むことは大変だろう(註10)。Fancyerという視点から見ると、シェイクスピアの言葉をしゃべる鳥たちは実に雄弁である。ヘンリー4世第1部には、個人的な恨みの言葉を教え込んだり、歌を教えたりする場面が書かれており(註11)、時代は下がるがハーディーの「テス」第1部の9には口笛を吹いて鳥を調教するよう依頼されるテスの姿が書かれている。また、ニシコクマルガラスに、自ら譜面片手に歌って歌を教えている婦人を描いたマニャスコ(Magnasco, Alessandro 1667-1749)の絵など画像として興味深い。

今回原典として用いたStainer版(註3A)は華麗な箱にバードフラジョレットと共に納められた美しい皮装本で貴重なものである。フラジョレットは1635年、メルセンヌが「宇宙の調和論」にフラジョレ flageolletとして指使い表、le Juneの曲と共に説明している。「最もやさしい音がする、演奏も非常に簡単」な楽器は、1581年パリのSieu de Juvignyによって考案されたとメルセンヌは記しているが(註12)、フラジョレットの手引書はイギリスにおいてGreetingが1661年に出版して以来改版が続いた(註5参照)。

日記で知られるピープスは、夫人のフラジョレット教師として、このGreetingに依頼をしているが、Drumbleby製作のリコーダーを店で買い求めるなど、彼の日記から当時のフラジョレットの隆盛を知ることができる(註13)。1700年にパリで出版されたフレヨン-ポンサーン

の著作が扱うフラジヨレは最低音 d' となっており、メルセンヌと共通している。「楽しみ」は g' 管として書かれているが、最高音13, 14度上を除いて指使いは共通している（註14）。

Stainer 版のバードフラジヨレットは象牙製、細い円筒で長さ137mm、太さ11mm、円筒形内径を有している。表紙に描かれた非常に細い外観のフラジヨレットは、リップ部真上に少し太くした所があり、ここに海綿状の吸湿物を挿入して、ウインドウエイに付着する水滴を防いだものである（図1）。

前述したピープスの日記には1664年4月25日ヨーク公の所で聞いた東インドの鳥が出てくる。馬のようにいないたり、いろいろの芸をして「こんな上等の鳥の声を聞くのは初めてだ」と書かれている（註15）。日記には外科医ピアーズ氏からの献上ということになっているが、「楽しみ」には東インドのナイチンゲール East India Nightingale が輸入された鳥として登場する。この鳥はフィリピン、マレーシアなどで見られるシキチョウ *Shawa* (*copsychus* 属, シキチョウ属) だろう（註16）。一方表紙には明示されながら、曲集に収録されていない鳥、またオウムのように特定するのが困難な鳥、邦訳で曖昧な命名もあり、学名と共にここに掲載された鳥名を書き出した。

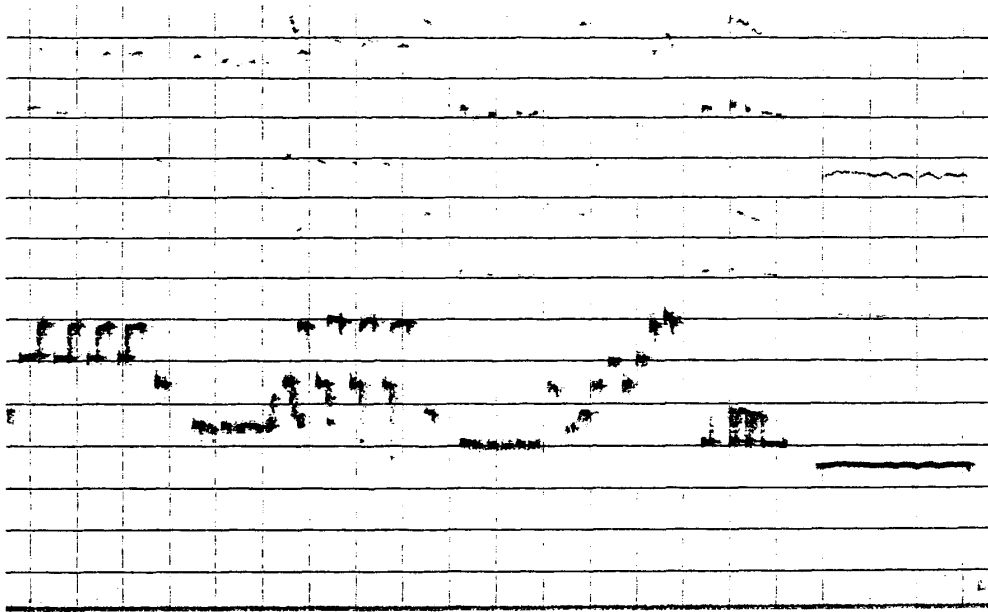
「楽しみ」の名前 和名 学名の順で表示する。

Bull Finch (ヨーロッパ)ウソ *Pyrrhula pyrrhula*, Wood Lark モリヒバリ *Lullula arborea*, Linnet ムネアカヒワ *Carduelis cannabina*, Sky Lark ヒバリ *Alauda arvensis*, Nightingale サヨナキドリ *Luscinia megarhyncha*, Starling ホシムクドリ *Strunus Vulgaris*, Sparrow イエスズメ *Passer domesticus*, Throstle(Trio-fill) ウタツグミ (Song Thrush) *Turdus philomelos*, Canary bird カナリア *Serinus canaria*, East India Nightingale シキチョウ属 series *Copsychus* (属名までしか確定はできない), Parrot(Grey Parrot) オウム (ヨウム) 属名すら確定できない（註17）。

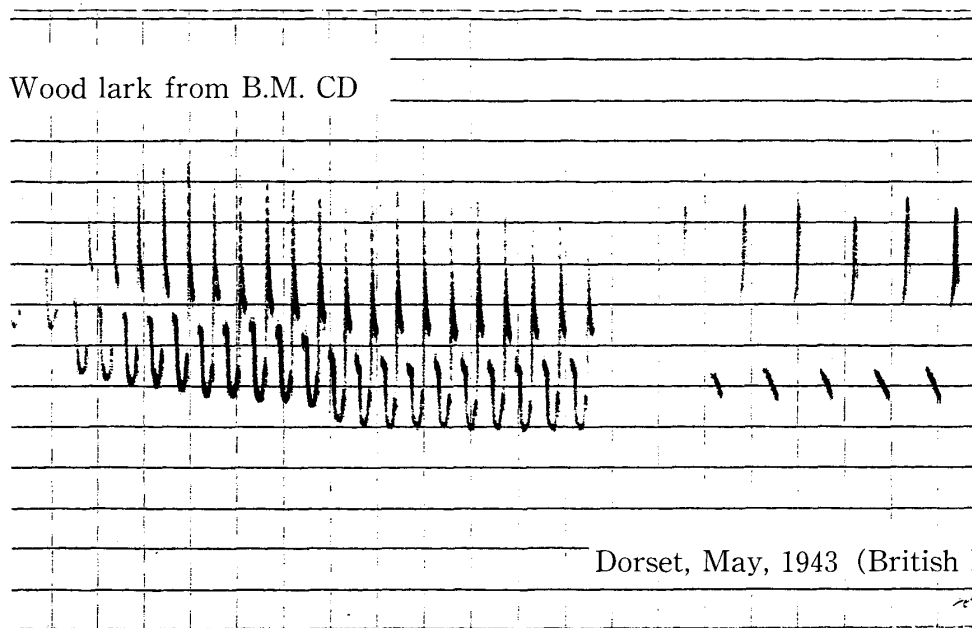
この「楽しみ」に書かれた曲と実際の鳥の鳴き声には共通点はあるのだろうか。鳥の鳴き声分析に用いられるソナグラフを用いてみた。筆者は「楽しみ」から2曲バードフラジヨレットを用いて録音を行ないウソとモリヒバリに関して自然の鳥との対比を行なった。モリヒバリは日本には生息しないヒバリの仲間だが「驚くほど豊かな連続した鳴き声、間に休みが入る。透明な、よどみ無い、柔らかで甘い、喜ばしいフルートのような声がパターンの的に下降していく。1句毎に次第に下がるその効果は、蜜のようにとっても甘く、旋律的で、物悲しいぐらいに情感がこもっている」（註18）。

ソナグラフ図1 Wood Lark

Wood Lark by Bird Flageolet (表1の wood Lark no. 1)



Cross Axis per Second/Vertical Axis per 500Hz (横軸一単位 一秒 縦軸一単位 500Hz)



Cross Axis per Second/Vertical Axis per 500Hz (横軸一単位 一秒 縦軸一単位 500Hz)

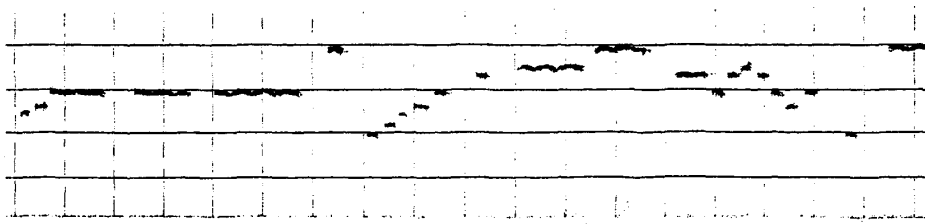
ソナグラフ図1 音源 Wood Lark (モリヒバリ)

縦並びで連続する歌声はトリルに相当するが、1コマ2~3音で8分音符、16分音符に値している。バードフラジョレットで演奏した初めのやや濃く太くなっている所がやはり同音反復されて、モリヒバリと時間的に一致しているのが見られ、3度のトリル、特に3番目の部分はソナグラフ上、音型としても明瞭に現れている(註19)。

ウソは青灰色で、頭、翼、尾は黒色。頬と喉は赤色の美しい鳥であるが、鳴き声の種類は多く、口笛のような独特の音色を持っている。歌は個体差が大きく「鳴き声は組になった数多くの単位で、時に6～7分続く。1単位は連続音やトリル、コロコロ声で構成される」、[求愛歌など相手の目標がある場合には、2～3 m でしか聞こえないほど鳴き声は小さく、喉の動きで歌っていることを確認できるが、目標が無い場合には20m 位離れても聞こえるほど大きい声で歌う] ウソの歌の持つ機能に関しては非常に詳しく研究されている（註20）。

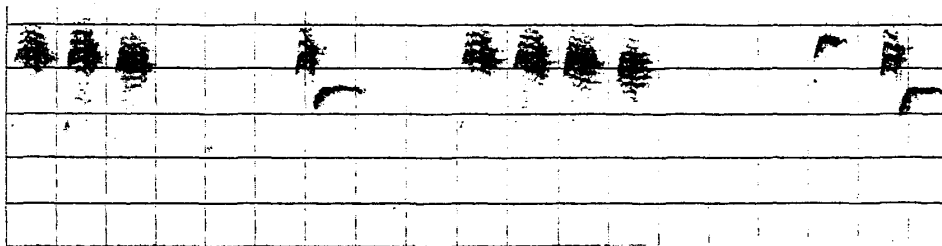
## ソナグラフ図 2 Bullfinch

Bullfinch by Soprano Recorder (表1の Bullfinch no. 1)



Bullfinch 野鳥大鑑

(御岳山 1988)



Cross Axis per Second/Vertical Axis per 500Hz (横軸一単位 一秒 縦軸一単位 500Hz)

### ソナグラフ図 2 音源 Bull Finch (ウソ)

ウソの phew という口笛のような声は、時間軸のずれはあるが（演奏をより速くする）初めの長い音とトリルの部分に見ることができるだろう。ソプラニーノを用いた時の純音として現れる図上の線の太さと、より雑音を含んだ、より太いバードフラジレットを比較すると、後者の方がより自然の鳴き声に近いものであることが分る。また、音の高さを比較してもソプラニーノの最高音の更に500Hz 高い所に最低音があるなど、類似を問題にするならば、バードフラジレットの方に、より鳥に近いものを求められるだろう。

さて、小鳥愛好家の「楽しみ」が実際に鳥を調教するための曲集として編纂されたのだろうか。序文からは、音域的な設定と、自然の鳴き声に合わせた旋律の配慮しか推測することはできない。例えば、孵化後どのように、何の餌を与え手飼いをするのか、いつから、どのくらいの期間、どこで教えはじめるのかについて記述は見られない。ここで鳥はなぜ鳴くのかを考えておこう。「鳥のさえずりが示すのは、その鳥の種と個体、性熟成して縄張りを持つこと、繁殖の用意をしていることである」（註21）。

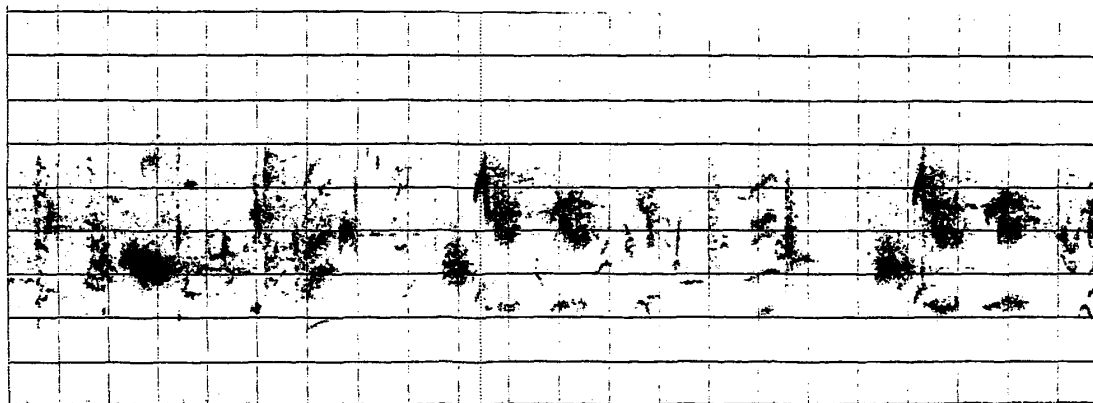
鳥の歌がなんらかの役割、または機能を有していると考え、まずは同種の他個体に自分の存在を知らせる役割があるだろう。歌を他個体に向けられた宣言歌として考えれば、縄張り宣言、求愛宣言、更には危険回避の宣言だったりする。更に、餌と水、他者の縄張り略奪者など環境情報に関し歌うとも考えられる（註22）。

日本では歌を「地鳴き」と「さえずり」に区別しているが、「歌は一般に雄の成鳥が繁殖期に歌い、通常地鳴きが20分の1秒程度なのに比べ歌は複雑で長く、短くても1秒、鳴く鳥では何分も続く。成鳥になる前、あるいは繁殖期の前の鳴き方を、サブソング Subsong と呼び、通常の鳴き方（full song）よりも音量は小さく、音色も純粹でない長めのフレーズが多く、一般的に洗練されていない」（註23）。

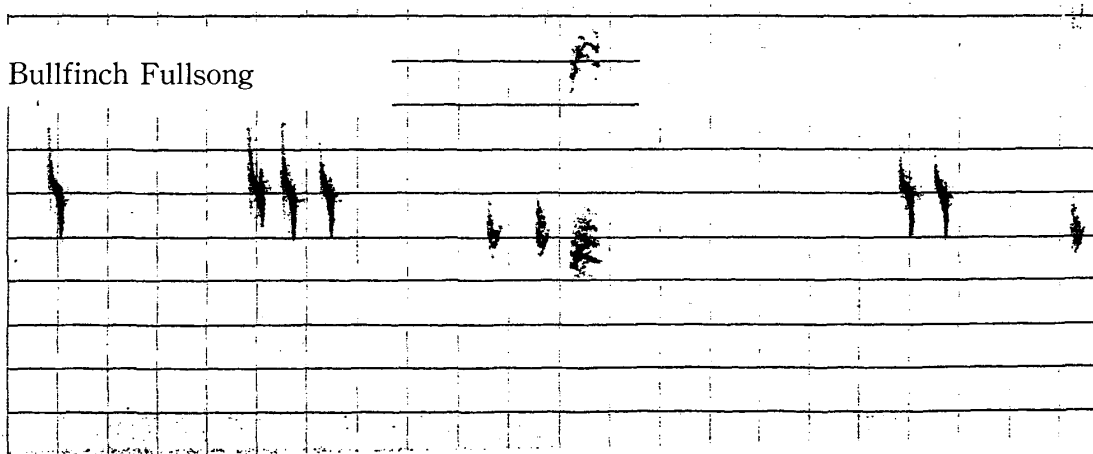
### ソナグラフ図3 Bullfinch (Subsong と Fullsong)

Bullfinch Subsong

(Sweden 1953)



上図の複雑な鳴き声パターンは、下図のように非常に明解に整理された。



Cross Axis per Second/Vertical Axis per 500Hz (横軸一単位 一秒 縦軸一単位 500Hz)

それでは、このようなサブソングからフルソングへの移行切り替わりはどのように行なわれるのだろうか。ウソのサブソングのソナグラフとフルソングのそれを比較すると、それぞれの違いをはっきり目で見ることができよう。

比較ソナグラフ図3（註24）



Nice(1943)はウタスズメ Song Sparrowの観察を通してサブソングを「いつも小さく鳴いている warbling」, 更に少し時間が立つと「何か短い歌, ほとんど warbling, 歌と歌との間隔は, 歌それ自体より長い」ように鳥が鳴くと説明した(註25)。この動詞 warble は, 歌や楽器で旋律を演奏するという意味だったが, 14世紀には転じて特に鳥がやさしく, 旋律的に歌うこと, 歌う時にふるわせたり, 柔らかく, 甘く鳥のように歌うことの意味で使われた(OED)。Warbleはsingより小さな声でトリルしている感じで, 次第にsingへと発展していく。MarlerはこのNiceの研究を一步進めてズアオアトリ Chaffinchの観察によって歌の発展段階を以下の表のように7段階に分けている(註25 op. cit.)。

Marler/PetersによるChaffinchの歌発展段階(1がフルソング, 7がサブソング)

段階	節(歌の単位を構成する)		歌それ自体		
	歌の形態(morphology)繰り返し		歌の順序	長さ	
Crystallized	1	stereotyped	clear trills	stable order	short
Plastic song	2	stereotyped	clear trills	variable order	short
	3	minor variations	clear trills	stable order	longer
	4	variable	clear trills	variable order	long and variable
Subplastic song	5	rudiments (兆し)	some	variable order	long and variable
	6	rudiments	none	variable order	variable
Subsong	7	none	none	none	variable

最終の発展段階, 段階1は完成歌を極めたこと, 鳥の歌の結晶化 Crystallizeを意味する。その時歌は決まり文句ときれいなトリル音で構成され, その順序は安定して, 短い歌である。それ以前は可塑的な(plastic)段階で, トリル音などはあるもの, 歌の節や順序は不安定に変化する。Marler/Petersのこの表では美しいトリル音が出てきた時を可塑歌の始まりと見ている。節(syllable)の兆しをもって亜可塑歌 subplastic段階とするが, 節にトリルは含まれていない。サブソングは節, 歌とも形のわかる兆しすらなく, その長さもまちまちである。フルソングとして結晶化するまでサブソングのたどる段階は, 種間格差, 個体格差あるにせよ, ほぼこれらの段階を経過する。

それではさえずりを完全に発達させるために不可欠の要素は何なのか。それには, さえずりを聞く段階と, それを学習する2つの段階が不可欠だ。最初の学習段階は孵化後数カ月の間に起り, その時幼鳥は完全なさえずりの表現を憶え, そして後の学習段階で成鳥になってから, この憶えた表現に合わせてさえずりを再生するように学習する。結論から言えば, 幼鳥に刷り

込み imprinting が行なわれ、自種の歌を選択して、それを鋳型ともいえる歌に合わせて学習し、性成熟して、句の形が徐々に固まり、更に句の形も、節の内容も、歌全体の構造も固まって、歌が結晶化するといえる。研究者たちは手飼いで育てた鳥たちの発育段階で隔離状態を作り、どの段階で学習できなかったことが、その後の歌の完全化を疎外するかを実験している。又聴覚神経を遮断することにより、いつの段階で聴覚を失うことが鳥本来のさえずりを不可能なものにするかの正確な実験も行なっている。その詳細を記す事はできないが、幼鳥の学習には、ある時期に親鳥のさえずりを聞くことができないと、その後決して正しくさえずることのできなくなる期間のあることが判明している（註26）。

その学習発段階は感受期 Sensitive period, Susceptible period(Armstrong op. cit.)とか臨界期 Critical period(キャッチポール)（註27）と呼ばれる。鳥の種間差や個体差があるけれども、それは孵化後10日目から50日頃までで（オックスフォード動物行動学事典、模倣の項）、丁度サブソングの時期に対応している（註27op. cit.）。

鳥の調教には、それに適したウグイス、ノジコ、ヒガラ、ヒバリなどと、むしろ教えることが不可能なメジロ、ナキウズラなど2種類があるらしい（註2）。日本では「付け子」と呼ばれ、成鳥を幼鳥の側に置きさえずりを教える伝統が存在しているが、付け子を行なうには期限があり、ウグイスでは年3回、6月～7月、7月から～8月、12月～1月と時期をずらせて付け、その期間もホオジロでは80～100日、ヒバリでは50日、コマドリでは3～7日として伝承されたい（註28）。それぞれの鳥の調教期間（付け子期間）の違いは、種間差としてあらわれる感受期の違いである。ウグイスに関しては素晴らしい調教の方法が書き残されている（註29）。上坪が示したウグイスの鳴き方の発段階を引用する。日本で行なわれた方法がロンドンで行なわれたかは不明であるが、各鳥固有の歌発段階の把握無しに「愛好家」の成功は望めないだろう。さて、昭和50年頃まで東京本所、深川や千葉の上総中山周辺はウグイスの鳴き合わせ会が頻繁に行なわれたようだ。関東の場合5月の連休の頃、巣作り、抱卵したウグイスは14日で孵化する。それを手飼いにして（餌を差すという）6月初めに差し上がる。この頃は小声でぐぜっている（サブソングに対応する）。差し上がって1ヶ月以内に付け子をする（初めての鳴き付けを地付けと呼ぶ）。鳥を飼う籠（籠桶、こおけ）なども重要な役割を担っており環境についての説明は詳細を極めている。7月末から8月に換羽の時期になり（トヤに入るといふ）ここで初音を鳴き出し、これが土用小鳴きと呼ばれる。10月中旬に鳴きまよりの付け子をし「あぶる」と呼ばれる日照時間を長く錯覚させるため鳥を電灯下に置き、初春の初鳴きを待つ。しかし本当の鳴き出しは2年目からである。鳴き付けを行なうには、周囲が静かな、早朝がよく、鳴き声を聞かせるには親鳥がよく鳴いている場合には15分くらい、そして親と隔離して聞こえないようにし、30分休み、2回目を15分位聞かせる。

この最初の地付けは、差し上がってから（手飼いで餌をやらなくなってから）1ヶ月となっている。毎日付ける時も、休む時もあるが、休む日を設け空白ができると新鮮味が生じ印象的になるようだ。「だいたいヒナは成育していく段階で時期がくれば自然に鳴きを覚える意欲が

盛んになって、それが小声で文句の定まっていな鳴き方、いわゆるぐぜりなどに現れてくるものです。その時に付ければ案外たやすく覚えるものです。「だいたい7月末から8月の候に至る間で、いわゆる初音を鳴き出します。土用小鳴きともいいますが、このときはぐぜりではなく若干の文句も幾らか調子をつけるようになります」。これは可塑歌 plastic song に対応する。「秋鳴きとその後にくる本鳴きとは鳴き方が違うことがあります。鳴きの固まる以前のヒナはいったん鳴きが止って次に鳴き出す時は必ずしも前と同じ鳴き方をするものではありません」。これが、可塑歌の特徴だろう。「鳴き出しは口切りといいます、初めは小さい声でぐぜり出し、次第に文句を練習し、そのうち鳴きがまとまってくるわけです」。このフルソングへの整理段階を鳴きまとめとよぶ（註29）。

「楽しみ」を実践する道は、現在あるのだろうか。日本の伝統的なウグイスの飼い方に見られる成長や歌発展の把握を、現代の動物生態学の研究と比較してみると、その合致が非常に多いことに驚く。上坪が示したウグイスに対する実に愛情豊かな目は、Armstrong が著書に書いている愛好家たちの記述と重なって興味深い。Thorpe がドイツにおけるウソの学校について書いている（Thorpe op. cit.）。「通常1クラス6羽づつ、暗い部屋に分けられる。食事が終わると、彼ら（ウソ）は練習を始めようとし、親しんだ音を真似しようとする。2, 3の音を真似始めるとすぐに光が部屋に差し込まれ、もっと陽気になって歌おうとした。ある期間この方法で仕込まれると、少年に任せられる。彼は朝から晩まで勤勉にオルガンを弾くが、それは任された鳥に教えるためで、その間規則的に先生が羽根の生えた生徒たちの進展を監督して回った。この回覧式の教え方は休み無く9ヶ月以上続けられ、その時までいきなりさを身につけ、パセージを忘れて落ちたり、間違っ続けたりしなくなった」。Thorpe はこの方法が有効であったとは書いていないが、ヘッセンやフルダにこの種の学校があったことを述べている。

結論的に、鳥の調教に適した感受期は非常に限られている。学習は短かい繰り返しを必要とし、休む間は暗い所に置く。18世紀初頭の音楽受容と生態観察の基礎に小鳥を歌わせた Fancier の道は、現在鳥類保護の名目でほとんど消滅したが、これは1つの総合文化的な業績だったのだ。「楽しみ」に取り上げられている鳥で、歌わせるのが可能かも知れないと Thorpe がいうのはウソのみでイエズメに歌を教えるのはほとんど不可能だろうと書いている。

この小論を終えるにあたって、ソナグラフ等御協力下さった、千葉県立中央博物館、同生態学研究室の大庭照代博士と、ピープスの日記について御協力下さった中央大学人文科学研究所上坪正徳教授に感謝申し上げます。

使用したソナグラフ：Signal Analysis Workstation, Model 5500, KAY Elemetrics Corp, Frequency range DC-8KZ, Time Axis 400mms

(本学講師＝リコーダ担当)

## 註

- 註1 アルダートン、デヴィッド『決定版 ペットバード百科』（島森尚子訳）誠文堂新光社、1997
- 註2 川村多実二『鳥の歌の科学』16鳥歌の個体差と地方差、25～27飼鳥の歌、中央公論社、1974
- 註3 A Schott 版編集者の Stanley Godman によるとこの出版は Richard Meares とそのライバル John Walsh (1695-1720) によって行なわれた。現在 Walsh 版は Rowe Collection, Kings College, Cambridge ; Cardiff Public Library ; Euing Collection, Glasgow University ; British Museum ; 南葵音楽文庫、Godman が記していない東京 I 博士所蔵のもの (Sir John Stainer の蔵書だったので Stainer 版と呼ぶ) があり、Meares 版は Dayton C. Miller Collection, Library Congress にある。1717年 “Post Boy” の新譜案内に Walsh が 20/21 June に、Meares が 7/9 May, 1/7 June にそれぞれ出版案内を掲載した。15 Dec, 1708 の “Daily Courant” に The Flageolet Reviv'd : or, The Bird Fancier's Delight (Walsh 286) が掲載されたが実物は未確認。  
Smith, William C. *A Bibliography of the Musical Works Published by John Walsh*. (Bibliographical Society) OUP, 1968
- 註3 B 小鳥愛好家の楽しみ、または最良の観察／そしてすべての鳴禽を教える方法  
フラジョレットやリコーダーを用いる／サイズと音色がふさわしいものを／スポンジや綿が湿った空気を調整して／レッスンは各鳥の音域や能力にそって、正しく作曲された。則ち森ヒバリ、クロウタドリ、ウタツグミ、スズメ、カナリア。ムネアカヒワ、ヨーロッパウソ、ホシムクドリのために  
(Walsh 版では Canary bird, Linnet, Bullfinch, Woodlark, Blackbird, Throutstill, Nightingale and Starling となっている。Meares 版からスズメが抜けてサヨナキドリが入った。しかし両版ともクロウタドリの曲例は無く、表紙タイトルには無い Parrot, Skylark, east India Nightingale が曲にある。
- 註3 C 私は、なかば義務のような責があるにせよ、私の特別な友人である作曲家への尊敬をこめて、この本の出版を進めたい。これらの小さな動物たちに教え、彼らが天空のハーモニーを歌うのを聞くことは、私の唯一の娯楽と喜びであり、驚きである。さて、私は各鳥の本性やどのくらい彼らが習うことができるのかを学んだ。本性に近付けばそれだけ、彼らが忘れないのは確実なのだ。急にさっとではなく、注意深く、徹底的に通読して頂きたい。私の紹介が無ければ、おそらく皆様が御存じにはならないだろうことを少し述べさせて頂きたい。それは、これらの課題が (鳥の) 本性と合致するのを目標に、間違えること無く、フラジョレットの音域内で作曲された最上のものだという事である。それぞれの課題に、あなたが教えようとする鳥としてどれがふさわしいかを表記した。この楽器を愛する皆さんが、Hills 氏による楽器の改良に謝意を表されますことを、彼はこの目的から課題に取り組み、またフラジョレットの名手なのである。この本よりもっと進みたい方は、どうか店までお越し下さい。Hills 氏が御相談させて頂きます、日付けをお知らせ下さい。
- 註4 ここでは、現代譜に従って Walsh, Meares 両版に亘って示している。Time の項目で//によって分けられているのは右が Walsh 版に表示されているもの。Canary bird 7は Hst を d” と表記しているが、譜面上のミスプリントを考慮すると e flat”” なので音域も 9 となる。Stainer 版には、以下の曲が収録されていない。  
Bullfinch 8, 10 ; Canarybird 2, 4 ; Starling 2 ; Throstle 1の 6 曲
- 註5 この時期の教本、曲集  
Greeting, Thomas 1661 The Pleasant Companion, or New Lessons and Instructions for the Flageolet (1673, 1680, 1683改版)

Hudgebut, John	1679	A Vade Mecum/for the Lovers of Musick
Banister, John	1681	The Most Pleasant Companion,/or/Choice New Lessons for the/Recorder or Flute
Clark, John	1682	The most Pleasant Companion, or Choicest new Lessons
	1700	The Recorder or Flute made easie
Salter, Humphery	1683	The Genteel Companion; /being exact Directions for the Recorder
Carr, Robert	1686	The Delightful Companion/or/Choice new lessons/For the Recorder or Flute
Walsh & Hare	1695	The Complete Flute Master or the whole Art of playing on ye Rechorder
	1697	The Second Book of the Complete Flute Master (1703, 1706, 1707, 1709, 1711, 1712, 1716, 1717, 1719, 1720, 巻番号だけ替えて同じタイトルで新しく出版した年号)
	1698	The New Flute Master
Banister, John	ca. 1699	The Second Part of the Gentleman's Tutor to the Flute
Young, John	1699	The Complete Instructor to the Flute/The Second Book
	1700	The Complete Instructor to the Flute/The Third Book
	1702	The Gentleman's Diversion; or the Flute made easie
	1706	Never Before Publish'd / The Flute-Master Complete Improv'd
	1707	The Flute Master-Master completely improv'd

1683年版の Greeting には表紙扉絵に机の上の譜面を見てフラジョレットを吹く紳士と、机の上にルネサンスタイプの継ぎ目無しアルトリコーダーが見られる。

註6 Lasocki, David R. *Professional Recorder Players in Englan. 1540-1740* (Ph. D dissertation) 1983, Chap XVII, XVIII, XIX

註7 Purcell, Henry  
The Prophetess(1690), King Arthur(1691), The Fairy Queen(1692), Timon of Athens (1694?), The Indian Queen(1695?), Theodosius(1680), Swifter, Isis, swifter flow(1681), Ye tuneful muses(1686?), Celestial music(1689), Of old when heroes thought it base(1690), Love's goddess sure was blind(1692), Hail, bright Cecilia(1692), Celebrate this festival (1693), Great parent, hail(1694)  
Handel, George Frederic  
Rinaldo(1711, 1711, 1712, 1713, 1714, 1717), Il pastor fido(1712), Teseo(1713), Amadigi di Gaula(1715, 1716, 1717)

註8 チャールズ 2 世, ジェームス 2 世のカトリシズム傾倒はフランス音楽を受け入れ, リュリーなどの舞踏曲が紹介された。しかし, 舞曲風リズムやバラード風の同時代作品を探したが類似をたどることしかできなかった。

Lully, Jean-Baptiste(1632-1687)のオペラバレーから  
“Persee” 1682 II/x (オウム 1) 譜例 4, “Armide” 1686 IV/i, IV/iv(カナリア 3) 譜例 5  
同時代曲集

“Apollo's Banqueto” 1670, “Apollo's Banqueto” 1701の1701年版から  
20, Scotch Tune in Measure for Measure(ヒバリ 3) 譜例 6  
61, Song Tune in the Pilgrim(ムネアカヒワ 1) 譜例 7



現代譜の編集者 Godman の前書きによると Beggar's Opera の “I'm like a skif” のアリアは “The Happy Clown” という名前で Dancing Master third edition 1718/19に見ることができるといふ。ゲイの乞食オペラの旋律は, 当時ロンドン市民に知られ, 親しまれていたバラ


- ドを集めて構成されており、それに作曲家の Pepush が和声、伴奏を付けて1728年に初演、出版されたオペラである。そのため、「楽しみ」と乞食オペラには時代的な不可逆さがある。
- 註9 ヴィクトリア朝時代、fancy という言葉は想像、思いつきの意味で fantasy と同意、同義に使われ、趣味としてペットの飼育など、好きな道や芸の実践を指していた。OED の fancy の第13項には fancier は動植物など、ある程度批評眼まで持ち合わせた“通の愛好家”を指し、接頭辞として dog-, flower-, pigeon-fancier などと用いられたとある。
- 註10 オールテック、リチャード『ロンドンの見せ物』（小池滋訳）国書刊行会、1990  
『ドレ画ヴィクトリア朝のロンドン』（小池滋監修）社会思想社、1994
- 註11 『ヘンリー 4 世第 1 部』、1 幕 3 場 ホットスパーの台詞「だがおれは、やつが眠っているところをつかまえてその耳に『モーティマー』とどなりこんでやる。いやそれより椋鳥に『モーティマー』とだけ鳴くよう芸を仕込み、やつのところの届けさせてやる。やつめ四六時中腹を立てておらねばなるまい」3 幕 1 場には、やはりホットスパーの台詞で歌を願ったのに断られた腹いせに、奥方に向かっていう台詞「歌がうまければ、すぐにでも仕立て屋になれるか、駒鳥に歌を仕込む芸人になるかして飯が食えるんだがな」『ヘンリー 4 世第 1 部（小田島雄志訳）』（シェイクスピア全集）白水社、1983より
- 註12 Mersenne, Marin (1588-1648) *Harmonie Universelle. Paris : 1636.* livre Ve, Proposition VI, VII “l’un des plus gentils, et de plus aysez de tous ceux qui sont en usage”
- 註13 Pepyes, Samuel (1633-1703) からフラジョレット関連の主な登場人物と日付けを記す。1659/60 17 Feb himself enjoy playing flageolet, 1666/67 28 Feb Greeting, Drumbleby, 1667 8 May Greeting, 1667/8 29 March Banister  
Schmidt, Lloyd J. *A Practical and Historical Source-Book for the Recorder* (Ph. D dissertation) 1959  
Samuel Pepys and the recorder or flageolet pp.499-506 Appendix
- 註14 Jean-Pierre Freillon-Poncein *La Véritable Maniere, d'apprendre a jouer en perfection de Hautbois, de la Flûte et du Flageolet.* Paris : 1700, p.15, “pour la flageolet”
- 註15 In the Duke’s Chamber there is a bird, given him by Mr. Pierce the surgeon, comes from East Indys-black the greatest part, with the finest collar of white about the neck. But talks many things, and neyes like the horse and other things, the best almost that ever I heard bird in my life. *The Diary of Samuel Pepys* G. Bell, 1928
- 註16 Armstrong, Edward A. *A Study of Bird Song.* Dover, 1973, Chap.V (Vocal Mimicry) p.73 の特定による
- 註17 Parrot について、Parrot は Psittaciformes 目、Psittacidae 科、Parrot の英語標記のある属は26属見つかった。オウム目に属する各種熱帯産の鳥類の総称とも言えるので、特定は困難であるが、OED は parrot の項で15~17世紀の用例として、Grey Parrot ヨウム Psittacus erithacus をもっとも可能性が高いとしている。和名、学名はすべて 山階芳麿『世界鳥類和名辞典』大学書林、1986を参考にしてている。
- 註18 *Handbook of the Birds in Europe the Middle east and North Africa, The Western Palearctic.* vol. V (Lullula arborea) OUP, 1988 pp.182-185  
Wood Lark の音源 British Bird Songs on CD (ed.Ron-Kettle), National Sound Archive, The British Museum
- 註19 笛は純音のため、構成倍音がグラフ上に現れている。次のウソはソプラニーノによって演奏したが、純音構成がより明瞭に現れている。
- 註20 *The Handbook of the Birds.* vol. VIII, OUP, 1994 (Pyrrhula pyrrhula) pp.824-826  
音源 『日本野鳥大鑑』（CD Book）小学館、1988
- 註21 小西正一『鳥はなぜ歌うのか』岩波新書338, 1994
- 註22 Armstrong, Edward A. *A Study of Bird Song.* Dover, 1973 (Bird utterance as language)

pp.1-27

- 註23 マクファーランド, ディヴィット『オックスフォード動物行動学事典』(木村武二監訳) どうぶつ社, 1993, 「音声信号」の項
- 註24 音源 [サブソング] (Sweden, 1953) Field Guide to the Bird Songs of Britain and Europe (SR Records) by Palmer, Boswell [フルソング] (場所, 時未確認) All the Bird Songs of Britain and Europe by Jean Roche (ACBN/NRS)
- 註25 Marler, Peter & Peters, Susan, *Subsong and Plastic song ; Their Role in the Vocal Learning Process*. vol.2 (Acoustic Communication in Birds) Academic Press 1982, pp.25-50
- 註26 マクファーランド, 前掲書, Marler /Peters op. cit. Thorpe, W. H. “Comments on”. The Bird Fancier’s Delight” : Together with notes on imitation in the Sub-song of the Chaffinch” *Ibis* 1955 vol.97 pp.247-251
- 註27 Marler/Peters op. cit  
キャッチポール, C.K.『鳥のボーカルコミュニケーション』(浦本貴紀, 大庭照代訳) 朝倉書房, 1981
- 註28 川村多実二『鳥の歌の科学』13 鳥歌の完成順序, 25 歌鳥の養成, 26 鳥の付子, 中央公論社, 川村の著作には, ソナグラフが使える以前に鳥の歌の発展段階を説明したものがあり, サブソングが結晶化する際には消えて残らないことを, 不要完成歌としてカタカナ表記している。
- 註29 上坪茂徳『ウグイスの飼い方鳴かせ方』日本文芸社, 1971

図1 ミアーズ版表紙及び前書き

Canary-bird  The Bird Fancier's Delight  Bull-finch  
**OR CHOICE**  
*Observations,*  
*And Directions Concerning y<sup>e</sup> Teaching of all Sorts of Singing-*  
*birds, after y<sup>e</sup> Flagelet & Flute, if rightly made as to Size & tone,*  
*with a Method of fixing y<sup>e</sup> nett Air, in a Spung or Cotton, with Lessons*  
*properly Composed, within y<sup>e</sup> Compass & faculty of each Bird, Viz<sup>t</sup> for y<sup>e</sup>*  
*Wood-lark, Black-bird, Throustill, House-sparrow, Canary-bird,*  
*Black-thorn-Linnet, Garden-Bull-finch, and Starling.*



London Printed & Sold by Richard Meares, Musical-Instrument-maker at y<sup>e</sup> Golden Violl  
in S. Pauls Church-yard. Price 1<sup>s</sup>. 1717.

*To the Reader*

*I Come with great Willingness, though under y<sup>e</sup> Obligation, likewise of a Duty, of printing this Book, out of Respect to y<sup>e</sup> Composer, y<sup>e</sup> one being my particular Friend, & y<sup>e</sup> other my singular Entertainment & Delight, to teach & hear, these little, Animals Warble out their Celestial Harmony, to y<sup>e</sup> great Surprise of all that now & have Studied the nature of Each bird, what Compass they are Capable of Learning, & for Certain, & nearer you Come to nature, y<sup>e</sup> longer they Retain it, & are not so Subject to Flash. Having now thoroughly, & Carefully, perused this Book, I Should reckon my Self a little wanting to y<sup>e</sup> publick, if I Acquaint not y<sup>e</sup> world, that it is y<sup>e</sup> Best & only Extent for y<sup>e</sup> Flagelet, these lessons, being all purposely Composed to hit nature, & to prevent Mistakes. Each Lesson, being markt, what movement is most proper for y<sup>e</sup> Bird, you Intend to teach. I hope it will be Gratefull to all Lovers of this Instrument, y<sup>e</sup> Improvement of this, is Owing to M<sup>r</sup>. Hills, who has Studied these Lessons on purpose, & is a fine performer on y<sup>e</sup> Flagelet, & to Encourage any, that Desires to advance farther then this book Contains, M<sup>r</sup>. Hills, may be Spoke with at my shop, giving a days notice.*



譜例 1

Bull Finch

譜例 2

Sky Lark

譜例 3

Parrot

譜例 4

Parrot I/Persee II/x Lully Tragedie - Lyrique 1682/(I'm like a skiff Gay Beggar's Opera)

Parrot

Dieux.  
1<sup>er</sup> Dessus.

Quel'En-fer, la Terre et les Cieux, Quel'En-fer, la Terre et les Cieux, Que

2<sup>e</sup> Dessus (Haute-Contre)

Quel'En-fer, la Terre et les Cieux, la Terre et les Cieux, Que

Ténors (Tailles)

Quel'En-fer, la Terre et les Cieux, la Terre et les Cieux, Que

Basses.

Quel'En-fer, la Terre et les Cieux, la Terre et les Cieux, Que

譜例 5

Canary Bird 3/Armide IV/I Lully Tragedie 1686

Canary Bird

AIR.

(\*)

(\*) En 6 dans la Part<sup>me</sup>

譜例 6

Skylark 3/Scotch Tune in Measure for measure Apollo's Banquet 1701

Sky Lark

20 **A**

Scotch Tune in Measure for Measure.

譜例 7

Linnet 1/Song Tune in the Pillgirm

Apollo's Banquet 1701

A proper Tune for a Linnet

This musical score is for a piece titled "A proper Tune for a Linnet". It is written for a lute or similar stringed instrument, featuring a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The score consists of two systems, each with a single melodic line on a five-line staff and a corresponding bass line on a four-line staff. The melody is characterized by a series of eighth and sixteenth notes, with some rests and a final cadence. The bass line provides a rhythmic accompaniment with various note values and rests.

61 S . Ong Tunc in the Pillgirm.

This musical score is for a piece titled "Ong Tunc in the Pillgirm." It is written for a lute or similar stringed instrument, featuring a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The score consists of three systems, each with a single melodic line on a five-line staff and a corresponding bass line on a four-line staff. The melody is characterized by a series of eighth and sixteenth notes, with some rests and a final cadence. The bass line provides a rhythmic accompaniment with various note values and rests.